

2026年2月9日

採点規則 2025年版 女子体操競技情報2号

(公財)日本体操協会
ロサンゼルスオリンピック強化委員会
女子体操競技強化本部
審判委員会体操競技女子審判本部

日本体操協会では、ロサンゼルスオリンピック強化委員会体操競技女子強化本部による2026年強化指針と審判委員会体操競技女子審判本部による2026年採点指針をここに通達し、この通達をもつて適用といたします。

2026 年 強化指針

ロサンゼルスオリンピック強化委員会
女子体操競技強化本部
村上 茉愛

はじめに

2025 年は、FISU ワールドユニバーシティゲームズ、世界選手権、世界ジュニア選手権など主要国際大会において、2024 年から積み重ねてきた強化策の成果を発揮し、国際舞台で安定した好成績を残すことを目指していました。その結果、世界選手権をはじめ複数の国際大会で当初の目標を大きく上回る成果に繋がり、世界選手権においても、個人総合で 2 名が同時入賞を果たすなど、日本女子として近年稀に見る好成績を残すことができました。これらの結果は、“個人総合力の強化”を掲げて取り組んできた成果でもあり、強化プログラム全体が良い方向に機能し始めていると前向きに捉える事ができます。また、種目別では杉原愛子選手が平均台で銅メダル、ゆかで金メダルを獲得し、これら 2 種目が日本女子の強みであることを改めて示すことができました。

世界ジュニアでは、団体総合銀メダル、南埜佑芽選手の個人総合金メダル、西山実沙選手のゆか金メダルなど、複数の金メダルを獲得することができました。これらの成果は、2028 ロス五輪に向けた素晴らしいスタートであると同時に、この成績を維持・発展させるためには、今以上の競技力向上が求められると再認識しています。

そのような中、世界の動向に目を向けてみると、世界選手権では、五輪翌年の新ルール初年度で採点傾向が不透明な中、多くの強豪国が「ベテラン 1~2 名 + 若手 2~3 名」という構成で臨んでいる国が多いように感じました。その影響もあり、全体として若手選手を中心に平均台やゆかの着地に不安定さが見られた一方、日本選手は演技構成の難度よりも演技の質が評価され、これまでの強化策が着実に実を結びつつあることが確認できました。質の追求は引き続き日本の強みであり、今後も継続すべき方向性ではありますが、しかしながら、2026 年はロス五輪予選が始まる年であり、世界全体の競技力がさらに向上することが予想されます。よって、目標達成のためには日本全体として D スコアの向上が最優先課題とし、強化をしていきたいと思います。

また、世界ジュニアでは、フランス・アメリカのジュニア層の成長が顕著で、シニア並みの D スコアを持つ選手も見られ、ジュニア世代の強化や育成が進んでいます。一方で、D スコアが高くて、器具への適応能力、ポディウム経験、緊張下での実力発揮などが不足し、大過失によってメダルを逃すケースも多くありました。これは日本選手にも当てはまる課題であり、ジュニア期から国際大会に参加する機会を増やし、早期に多様な環境への適応力を身につける強化体制の構築が急務であると考えます。

<ナショナル強化>

・目標

2025～2028：2028 ロス五輪団体総合銅メダル獲得

2026 : 世界選手権団体総合 3 位(ロス五輪出場権獲得)
アジア競技大会団体総合・個人総合・種目別 優勝

・重点課題

- ①正確な基礎と技術を積み上げ、高難度の技を高い質で実施できる“強靭な身体と確固たる技術”を養う。
- ②細部までこだわり抜き、ひとつひとつの動きを磨き上げることで、見る人を惹きつける“完成度と安定感”を追求する。
- ③強いプレッシャーがかかる場面でも自分を信じ、最高のパフォーマンスを発揮できる“心と体の強さ”を育てる。

・具体的取り組み

重点課題で示した「技術の質」「完成度」「心身の強さ」を実際の競技力として確かなものにするため、以下の具体的取り組みを進める。

世界大会において団体総合でメダルを獲得するには「チーム得点 165.00」以上が必須であり、そのためには日本チームの現在の弱点である「跳馬・段違い平行棒の強化」が不可欠である。これら 2 種目は高い D スコアが得点に直結するため、強豪国との差を埋めるには日本全体での取り組みが求められる。具体的には、跳馬では、D スコア 5.00 の跳躍技を行う選手は一定数存在するものの、より優位に試合を展開するには 5.40 の跳躍技が有効である。段違い平行棒では、D スコア 6.00 以上の演技を構成することが必要となるが、例えば D スコア 6.30・E スコア 8.200 の演技を実施し 14.500 以上を獲得できれば、種目別決勝進出の可能性も大いに高まり、日本チーム全体として大きな底上げが期待できる。

個人総合でのメダル獲得に向けては、最低でも 4 種目合計 56.000 を超えることが求められる。このため、D スコアは 4 種目合計 23.000 以上を目指していくかなければならない。2022～2024 年の世界大会において個人総合でメダル獲得している選手たちの D スコアは 22.50～23.00 であり、またはそれ以上獲得している。現状、日本全体の平均は 21.500～22.000 であることから、全体平均を 1.00～1.50 程度の向上を目指していきたい。(表 1 参照)

種目別では、シニア・ジュニア共に、メダル獲得が続いている。特に平均台、ゆかは日本の強みである丁寧で、安定した技さばきが評価されていることから、さらなるレベルアップを図っていきたい。

表1 個人総合目標得点

	VT	UB	BB	FX	合計
Dスコア	5.00	6.00	6.00	6.00	23.00
Eスコア	9.00	8.00	8.00	8.00	33.00
					56.00

同時に、これらの技術的課題を確実に克服するためには、まず選手一人ひとりが自ら考え、課題に向き合い、主体的に行動する“自律した姿勢”を育むことが大変重要である。また、選手個々の努力に加え、チーム全体としての連携も欠かせない。選手同士の相互理解と支え合いに加え、コーチ・スタッフ・審判との

情報共有を密にし、共通の目標に向けて一体となって取り組む体制を整えることが求められる。さらに、選手を支える多様な立場のメンバーが互いを尊重し、それぞれの経験・知識・技能を結集することで、強化の質が高まり、目標達成へつながっていく。

以下に各種目の強化の目標と方向性、具体的な取り組みを示す。

＜跳馬＞

Dスコア5.00～5.40以上の跳躍を習得し、14.000超の得点を安定して獲得することを目標とする。この目標達成のためには、前方(転回系)・側方(ツカハラ系)・後方(ユルチェンコ系、1/2ひねりを含む)のすべてのグループの技において、助走から踏切、着手に至る一連の動作の効率と精度を向上させ、高難度の跳躍技およびEスコア9.00超を獲得できる高さのある跳躍につながる技術の基盤の強化が求められる。さらに、着地での減点を最小限に抑えるため、“着地を止める力”を身につける必要がある。

＜段違い平行棒＞

Dスコア6.00～6.50の演技構成を可能にする高難度技を習得することを目標とする。この目標達成のためには、背面とび出し(マロニー系)や背面とび越し(トカチエフ系)など、空中局面を伴う技の習得が不可欠である。また、マロニー系やトカチエフ系と移動技の組み合わせを演技に取り入れ、構成価値点を高める必要がある。さらに、倒立および倒立ひねり技の終末局面における角度の精度を高めると共に、空中局面を伴う技における空中姿勢の美しさと安定感を追求する。

＜平均台＞

Dスコア6.00～6.50の演技構成を可能にする高難度技および組み合わせを習得することを目標とする。この目標達成のためには、ジャンプ系およびアクロバット系(終末技を含む)の高さと空中姿勢の正確性を向上させることが不可欠である。また、シリーズボーナスを獲得できるジャンプ系とアクロバット系の多様な組み合わせに積極的に取り組むと共に、そのための技術改善を図る。特にジャンプ系(輪とびなど)では、確実に難度承認され、かつ減点の少ない美しい姿勢での実施を徹底する。

＜ゆか＞

Dスコア6.00以上の演技構成を可能にする高難度技を習得することを目標とする。この目標達成のためには、ビッグタンブリングの習得が重要である。また、D～E難度以上のダンス系(特にターン)の習得により、多様な演技構成の実現に努める。さらに、コレオトレーニングの継続により、個性を生かした芸術性の向上と減点されない複雑な動きの習得を図る。加えて、高い頭位で着地を止める力(特に、2回宙返り系)を養成し、演技全体の完成度を高める。

＜ジュニアナショナル強化＞

・目標

2025～2032：2032 ブリスベン五輪団体総合金メダル

2026 : ユースオリンピック団体総合・個人総合・種目別優勝

・重点課題

- ① 正確な基礎と技術を積み重ね、高難度の技につながる“搖るぎない土台”を築く。
- ② 一つひとつの動きを丁寧に磨き上げ、将来の武器となる“質の高さと安定感”を育てる。
- ③ 不慣れな環境や大舞台にも臆せず、自分の力を発揮できる“適応力と勝負強さ”を養う。

・具体的取り組み

重点課題で示した内容を将来の競技力として確かなものにするため、ジュニアナショナル強化では昨年度までの方針を継続しつつ、「D スコア向上につながる徹底した基本技術の習得」を最重要課題とする。

ジュニアナショナル強化では、昨年度までの方針を継続しつつ、「D スコア向上につながる徹底した基本技術の習得」を最重要課題とする。基本に忠実で正確な技術に基づく「美しい体操」と「質の高い技の実施」を追求し、将来、世界でメダルを獲得できる選手の育成を目指す。また、ジュニア選手の年齢・発育・発達段階に十分配慮し、段階的かつ計画的な強化を進める。さらには、このような強化方針のもと、長きにわたり世界のトップレベルで戦い続けることができる選手の育成を目指す。

以下に各種目の強化の目標と方向性、具体的な取り組みを示す。

＜跳馬＞

将来の高難度跳躍につながる基本技術の習得を目標とする。この目標を達成するためには、現時点では D スコア 5.00 以上の跳躍の習得を目指して、助走、踏切、第一空中局面、着手、第二空中局面および着地の各局面の動作を効率的に実施するための正しい技術を身につけることが求められる。

具体的には、助走、踏切については、前方(転回系)・側方(ツカハラ系)の跳躍の有効な踏み切りを実現するための姿勢を習得する。また後方系(ユルチェンコ系、1/2 ひねりを含む)についてはロンダートの基礎練習を徹底する。第一空中局面および着手については、着地面を高くしたマットを活用した突き手練習により、雄大な第二空中局面につながる着手技術を強化する。第二空中局面については、トランポリン等を用いて空中での複雑な身体操作を可能にするための感覚練習を継続的に行う。

＜段違い平行棒＞

D スコアの高い演技構成につながる基礎技術の習得を段階的に進めることを目標とする。この目標を達成するためには、器具の特性(主にはバーのしなり)を理解し、それを効果的に活用できる基礎技術を身につけることが不可欠である。また、背面とび出し(マロニー系)や背面とび越し(トカチエフ系)などにつながる基礎技術を早期から習得し、将来の高難度構成に備える。

具体的には、バーのしなりを効果的に活用するための動き方を習得すると共に、高難度技につながる後方浮支持回転倒立、後方足裏支持回転倒立、後方浮腰回転倒立(開脚／閉脚)の習得と質の向上を図る。

＜平均台＞

芸術性の高い、安定した演技につながる姿勢と基礎技術の習得を目標とする。この目標を達成するた

めには、まず高いま先立ちを基盤とした美しい立ち姿勢を身につけることが求められる。また、高難度技や組み合わせの習得に向けては、十分な高さと開脚度を備えたジャンプ系および、身体面の向きにブレが生じないアクロバット系の技能を習得する必要がある。さらに、D 難度以上の終末技の習得に向けた基礎技術を確実に身につける。具体的には、姿勢づくりについては平均台上でのコレオグラフレーニングを実施し、ジャンプ系およびアクロバット系についてはまずはゆか上で質の高い実施ができるようにする。また、終末技については高難度技の実施を可能にするためのけり方と、そのために必要なロンダートの技術を習得する。

＜ゆか＞

D スコアの高い演技構成につながる基礎的な体力と技術、また芸術性の高い演技につながる動き方および感性を習得することを目標とする。この目標を達成するためには、ビッグタンブリングの実施に不可欠な筋力と体力、空中での身体操作能力を身につけることが求められる。また、高い芸術性に向けてのコレオグラフおよびダンス系の美しい姿勢と身体操作能力を習得する。具体的には、アクロバット系はゆかのばねを効果的に活用し鋭いけりを実現するための技術習得と筋力アップを図ると共に、トランポリン等を用いて空中での複雑な身体操作を可能にするための感覚を習得する。また、多様なジャンルのダンス要素を取り入れたコレオグラフレーニングと、高難度のダンス系技の実施を可能にする柔軟性と身体をコントロールする能力の獲得を図る。

以上

2026年 採点指針

審判委員会体操競技女子審判本部

全体として

ロサンゼルスオリンピック強化委員会女子強化本部よりオリンピックに向けての中長期的な強化方針が掲げられました。オリンピックでのメダル獲得は、日本全体の目標であり、強化選手のみならず各地の現場のコーチ、選手、審判が一体となって取り組む必要があります。特に15歳以下のジュニア選手については、基本的な技や運動の習得、将来的に発展していくための基盤を築く大事な時期であるため、この中長期的な計画のもと日本全体で強化に取り組まなければなりません。採点においても、基礎基本の定着や正しい技術の習熟がなされているかにも着目し、単なる姿勢欠点だけでなくその技、運動の質を見極めた評価をしていくことが大切です。

また、オリンピックでのメダル獲得を成し遂げるためには、日本全体でDスコア向上に向けた取り組みを推進していかなければなりませんが、身体のすみずみまでコントロールされた欠点のない美しい姿勢であることが大前提です。世界の舞台でも日本選手の姿勢の美しさは高い評価を受けています。これは日本選手の強みと言えます。日本選手がさらに飛躍していくためには、この強みを最大限に活かすこと、そして大きさのあるダイナミックな技の実施、演技が必要になります。美しさだけではない、美しくて迫力のあるダイナミックな演技が日本選手の持ち味となるべく強化、審判ともに取り組んでまいりましょう。

2026年国内すべての競技会ではこれまでの指針を踏襲し、美しい姿勢での演技の上に大きさのある運動、技の実施を採点上の最重要項目とします。高いDスコアを狙っている演技に対しても各技の姿勢欠点はもちろん演技全体を通した身体の姿勢や足先の美しさに欠ける演技は厳密に減点し、美しい姿勢での演技との差を明確化することといたします。

2026年の国内競技会では以下の3項目を採点上の最重要項目として採点をします。

ただし、15歳以下の選手を対象とする競技会は、後述「15歳以下の選手強化に向けた指針」を適用します。

- ① 身体の細部までコントロールされたハリのある美しい姿勢
- ② 大きさのある実施(技・運動・動き)
- ③ 欠点のない正確な技の実施

各種目について

<跳馬>

- ① Dスコアの高い跳躍技の実施
- ② 跳躍全体にスピード感があり、高さと距離を伴うダイナミックな実施
- ③ 着地の先取りができた高い体勢での安定した着地

【採点上の留意点】

- 各局面において著しい技術不良が見られる跳躍については、各減点項目を有効に活用し厳密に減点をする。第1空中局面、支持局面にも注視し、第10章跳馬「種目特有な実施減点」を有効に活用し減点をする。
- ダイナミックさに欠ける跳躍については、跳躍の大きさだけでなく、技の難易度から受ける迫力や雄大性などを加味し、第10章跳馬「種目特有な実施減点」の「ダイナミックさに欠ける」の減点項目に則り、明確に差をつける。
- 着地の先取りができず、高い体勢での安定した着地ができない跳躍については、第2空中局面の「種目特有な実施減点」、第9章「減点表」の「着地での欠点」の減点項目を有効に活用し、明確に差をつける。

<段違い平行棒>

- ① 腕の曲がり、膝・つま先の緩みがない美しく伸びた体線での正確な技の実施
 - ② 車輪系の技や支持回転系の技、空中局面を伴う技の振幅が大きいダイナミックな実施
 - ③ 多様な空中局面を伴う技を組み合わせ、高いDスコアを獲得できる演技構成*
- *ただし、①②を満たせていない実施に対しては厳密に減点をする。

【採点上の留意点】

- 上記の指針内容に沿わない姿勢欠点がある実施に対しては、第9章「減点表」、第11章段違い平行棒「種目特有な実施減点」の減点項目に則り、厳密に減点をする。
- け上がり、後ろ振り上げ倒立や支持回転系の技などの基本技の姿勢においては特に注視し、膝やつま先の緩みが見られる実施や、身体の姿勢が悪い実施に対しては、第9章「減点表」、第11章段違い平行棒「種目特有な実施減点」の「倒立、または振り上げ倒立の身体の姿勢が悪い」の減点項目に則り減点をし、明確に差をつける。
- 各技の振幅が小さい実施に対しては、第9章「減点表」の「技の高さ(大きさ)が不十分」の減点項目を有効に活用し減点をする。

<平均台>

- ① 立ち姿勢や歩く姿勢も含め、常に身体の細部までコントロールされた美しい姿勢での演技
 - ② –正確で安定したアーチバット系の技の実施
–ジャンプ・リープ・ホップに高さと身体のハリがあり、すべてのダンス系の技において姿勢欠点がない正確な実施
 - ③ 技と動きの流動性があり、さらにリズムとテンポの変化に富んだ芸術的な演技
 - ④ 多様な組み合わせを盛り込み、高いDスコアを獲得できる演技構成*
- *ただし、①②を満たせていない実施に対しては厳密に減点をする。

【採点上の留意点】

- 演技全体を通して身体の姿勢が悪い、膝・つま先が緩む実施に対しては、第12章平均台「芸術性と構成の減点」の「身体の姿勢が悪い」「美しさに欠ける足さばき」の減点項目に則り、厳密に減点をする。
- 演技全体を通して身体を最大限に使えていない、リズムとテンポの変化が不十分で技と動きの流動性に欠ける演技には、第12章平均台「芸術性と構成の減点」の「動きの大きさが不十分」「リズムとテンポ」の減点項目に則り、厳密に減点をする。

- アクロバット系の技において、姿勢欠点がある実施や正確さに欠ける実施に対しては、第9章「減点表」の減点項目に則り、厳密に減点をする。
- ジャンプ・リープ・ホップは特に注視し、高さが不十分な実施や姿勢欠点がある実施、正確さに欠ける実施に対しては、「技の高さが不十分」「身体の姿勢の減点」「正確さ」の減点項目に則り、厳密に減点をする。

＜ゆか＞

- ① 立ち姿勢や歩く姿勢も含め、常に身体の細部までコントロールされた美しい姿勢での演技
- ② – アクロバット系の技の高さがあり、着地姿勢までコントロールされた正確な実施
– ジャンプ・リープ・ホップに高さと身体のハリがあり、すべてのダンス系の技においてコントロールされた正確な実施
- ③ 身体を最大限に使い、表情だけでなく身体全体で表現された芸術的な演技
- ④ 高いDスコアを獲得できる演技構成*

*ただし、①②を満たせていない実施に対しては厳密に減点をする。

【採点上の留意点】

- 演技全体を通して身体の姿勢が悪い、つま先が伸びない、足が内向き、べた足での演技に対しては、第13章ゆか「芸術性と構成の減点」の「身体の姿勢が悪い」、「美しさに欠ける足さばき」の減点項目に則り、厳密に減点をする。
- アクロバット系の技において姿勢欠点がある実施、高さが不十分な実施に対しては、第9章「減点表」の減点項目を有効に活用し、減点をする。
- ダンス系の技は特に注視し、高さが不十分な実施や姿勢欠点がある実施、技の完了がコントロールされていない実施に対しては、「技の高さが不十分」「身体の姿勢の減点」「正確さ」「バランスを崩す」「余分なステップ、わずかなとび」「非常に大きなステップまたはとび」の減点項目に則り、厳密に減点をする。
- 演技全体を通して身体を最大限に使えていない、音楽のテーマに合った表現に欠ける演技に対しては、第13章ゆか「芸術性と構成の減点」の「動きの大きさが不十分」「音楽のスタイルと一致した表現力の欠如」「部分的または全体的に音楽と演技の関連性に欠ける」の減点項目に則り、厳密に減点をする。

◆15歳以下の選手強化に向けた指針◆

15歳以下の選手を対象とする競技会においては、次世代の選手育成を強化するために他の競技会の指針からさらに基礎基本を重要視した指針を以下のように示します。

対象競技会：全日本ジュニア選手権大会東西決勝大会 A クラス B クラス C クラス
　　全国中学校体育大会
　　全国ブロック選抜 U-12・U-15 体操競技選手権大会
　　全国体操小学生大会
　　その他、この年齢層を対象とした各地での大会（クラブ対抗など）

※全日本ジュニア選手権大会選手権1部については、全日本選手権の予選となる大会のため、この指針の適用外とする

<全体として>

- ① 身体の細部まで常に意識された美しい姿勢
- ② 技術欠点、姿勢欠点のない正確な基本技

<跳馬>

- ① 助走から着手までのスピードと鋭い突き上がりのあるダイナミックな跳躍
- ② 第1空中局面、支持局面に欠点がない正確な実施
- ③ 着地の先取りができる跳躍

<段違い平行棒>

- ① 腕の曲がり、膝・つま先の緩みがない美しく伸びた体線での正確な技の実施
- ② け上がり、後ろ振り上げ倒立や支持回転系の技において、姿勢欠点がない正確な技の実施
- ③ 振幅の大きな車輪系の技、支持回転系の技、終末技の実施

<平均台>

- ① 一美しい脚のラインと重心が高い立ち姿勢
　　－高いトウ立ちとつま先まで意識された美しい足のさばき
- ② 一姿勢欠点がない正確なacroバット系の技の実施
　　－ジャンプ・リープ・ホップに高さと身体のハリがあり、すべてのダンス系の技において姿勢欠点がない正確な実施
- ③ 身体を最大限に使い、演技全体に流れのある芸術的な演技

<ゆか>

- ① 立ち姿勢や歩く姿勢も含め、常に身体の細部までコントロールされた美しい姿勢
- ② 一acroバット系の技の高さがあり、着地姿勢までコントロールされた正確な実施
　　－ジャンプ・リープ・ホップに高さと身体のハリがあり、すべてのダンス系の技においてコントロールされた正確な実施
- ③ 身体を最大限に使い、表情だけでなく身体全体で表現された芸術的な演技

◆国内対応◆

【跳躍や演技を試みなかった場合の国内対応】

国内競技会においては、従来通り、グリーンライトの点灯または D1 審判員からの演技開始の合図の後、選手が D 審判員に挨拶をし、跳躍板や器具に触れてから再び挨拶することで 0.00 点として扱うこととする。(すべての種目)

【落下による中断時間中に止血が必要であると判断された場合の国内対応】

国内競技会においては、選手が器械から落下した際、演技続行の意志はあるが、止血が必要な状態であると医師または審判長が判断した場合、落下による中断時間(UB30 秒、BB10 秒)を超えて演技を中断しても減点なしで演技を再開することを認める。落下による中断時間(UB30 秒、BB10 秒)は、止血後から計時を始める。ただし、演技続行できないような怪我と医師が判断した場合は、この限りではない。(状態によっては演技続行不可と判断されることもある)

付録

【タイブレークの基準について】

*この規則は、FIG 競技規則によるオリンピック、世界選手権等 FIG 主催の競技会に向けた規則です。国内の競技会においては、各競技会の主催団体によって、この規則を準用または参考にし設定をしてください。

競技規則 FIG Technical Regulations 2026(抜粋)

第2章 体操競技に関する特別規定

第7条 タイブレーク ルール

第7条 7.1 予選

すべての決勝への出場資格:

同点の場合、どの順位においても、以下の通りの基準で順位を決定させる:

第7条 7.1.1 団体総合決勝のための予選

団体総合決勝の出場資格を獲得するためのポイントが同点の場合は、以下の基準を尊重して順位が決定される:

獲得した各種目のチーム得点の合計が最も高いチームが上位となる(つまり、男子は最も高い5種目のチーム得点の合計、必要に応じて4種目、3種目、2種目、1種目の得点の合計、女子は最も高い3種目のチーム得点の合計、必要に応じて2種目、1種目の得点を合計することによる)

さらに同点の場合は、どちらのチームも同じ順位とする。同点のチーム間で抽選を行い、団体総合決勝のスタート順を決定する。

第7条 7.1.2 個人総合決勝のための予選

個人総合決勝の出場資格を獲得するためのポイントが同点の場合は、以下の基準を尊重して順位が決定される:

1. 獲得した各種目の最終スコアの合計が最も高い選手が上位となる(つまり、男子は最も高い5種目の最終スコア、必要に応じて4種目、3種目、2種目、1種目の得点を、女子は最も高い3種目の最終スコア、必要に応じて2種目、1種目の得点を合計することによる)

2. さらに同点の場合は、すべての種目のEスコアの合計が高い選手が上位となる

3. さらに同点の場合は、すべての種目のDスコアの合計が高い選手が上位となる

さらに同点の場合は、どちらも同じ順位とする。同点の選手間で抽選を行い、個人総合決勝のスタート順を決定する。

第7条 7.1.3 種目別決勝のための予選

跳馬を除くすべての種目において種目別決勝の出場資格を獲得するためのポイントが同点の場合は、以下の基準を尊重して順位が決定される：

1. Eスコアが最も高い選手が上位となる
2. Dスコアが最も高い選手が上位となる

さらに同点の場合は、どちらも同じ順位とする。同点の選手間で抽選を行い、種目別決勝のスタート順を決定する。

跳馬における種目別決勝の出場資格を獲得するためのポイントが同点の場合は、以下の基準を尊重して順位が決定される：

1. 最終スコアを平均する前の2回の跳躍のスコアのうち、どちらか一方のスコアが高い選手が上位となる
2. 2回の跳躍のうち、どちらか一方のEスコアが高い選手が上位となる
3. 2回の跳躍のうち、どちらか一方のDスコアが高い選手が上位となる

さらに同点の場合は、どちらも同じ順位とする。同点の選手間で抽選を行い、種目別決勝のスタート順を決定する。

第7条 7.2 決勝

第7条 7.2.1 団体総合決勝

団体総合決勝においてポイントが同点の場合は、以下の基準を尊重して順位が決定される：

- 獲得した各種目のチーム得点の合計が最も高いチームが上位となる(つまり、男子は最も高い5種目のチーム得点の合計、必要に応じて4種目、3種目、2種目、1種目の得点の合計、女子は最も高い3種目のチーム得点の合計、必要に応じて2種目、1種目の得点を合計することによる)
- さらに同点の場合は、どちらのチームも同じ順位とする。

第7条 7.2.2 個人総合決勝

個人総合決勝においてポイントが同点の場合は、以下の基準を尊重して順位が決定される：

1. 獲得した各種目の最終スコアの合計が最も高い選手が上位となる(つまり、男子は最も高い5種目の最終スコア、必要に応じて4種目、3種目、2種目、1種目の得点を、女子は最も高い3種目の最終スコア、必要に応じて2種目、1種目の得点を合計することによる)
 2. さらに同点の場合は、すべての種目のEスコアの合計が高い選手が上位となる
 3. さらに同点の場合は、すべての種目のDスコアの合計が高い選手が上位となる
- さらに同点の場合は、どちらも同じ順位とする。

第7条 7.2.3 種目別決勝

跳馬を除くすべての種目においてポイントが同点の場合は、以下の基準を尊重して順位が決定される：

1. Eスコアが最も高い選手が上位となる
 2. Dスコアが最も高い選手が上位となる
- さらに同点の場合は、どちらも同じ順位とする。

跳馬においてポイントが同点の場合は、以下の基準を尊重して順位が決定される：

1. 最終スコアを平均する前の2回の跳躍のスコアのうち、どちらか一方のスコアが高い選手が上位となる
 2. 2回の跳躍のうち、どちらか一方のEスコアが高い選手が上位となる
 3. 2回の跳躍のうち、どちらか一方のDスコアが高い選手が上位となる
- さらに同点の場合は、どちらも同じ順位とする。

【マークについて】

採点規則 2.3.2 競技の服装

- f)最新の FIG 服装・広告規定に従い、自国のマークを競技の服装に付けなければならない。

2024 FIG 広告規定および競技服装（抜粋）

第5章 国のマーク

- すべての競技者は自国(国内では所属)を証明するマークを表示しなければならない。
このマークは、以下のものでなければならない：
 - 国旗または国名
 - フルネームもしくは国名を略した3文字の連盟コード(FIG 制定)でもよい
*国内では所属のマークまたは所属名(略称も可)
- 全体の面積は最低30 cm²とする
- マークの表示の場所は任意である。
- 自国のマークはそれぞれの選手に少なくとも1つは表示されなければならない。
- チームの場合、メンバー全員のマークは同じでなければならない。

第 53 回世界体操競技選手権大会 審判員報告

審判委員会体操競技女子審判本部

高橋 洋子

開催地: インドネシア ジャカルタ

大会期日: 2025 年 10 月 15 日(水)~10 月 26 日(日)

大会日程:

10 月 15 日	(水)	出国、現地到着
10 月 16 日	(木)	D 審判会議
10 月 17 日	(金)	男女ポディウム
10 月 18 日	(土)	女子ポディウム
10 月 19 日	(日)	男子予選、女子審判会議
10 月 20 日	(月)	男女予選
10 月 21 日	(火)	女子予選
10 月 22 日	(水)	男子個人総合決勝
10 月 23 日	(木)	女子個人総合決勝
10 月 24 日	(金)	男女種目別決勝 1 日目
10 月 25 日	(土)	男女種目別決勝 2 日目
10 月 26 日	(日)	出国、日本到着

選手団:

監 督	村上 茉愛	日本体操協会
コ ー チ	大野 和邦	株式会社 TRyAS
コ ー チ	豊島 リサ	戸田市スポーツセンター
コ ー チ	外村 和才	相好体操クラブ
コ ー チ	山崎 隆之	なんば体操クラブ-ncg
総 務	金谷 麻理子	日本体操協会／筑波大学
トレーナー	大野 達哉	船橋整形外科
選 手	杉原 愛子	株式会社 TRyAS
選 手	岸 里奈	戸田市スポーツセンター
選 手	岡村 真	相好体操クラブ／四日市大学
選 手	中村 遥香	なんば体操クラブ-ncg／相愛学園
帯同審判	高橋 洋子	日本体操協会審判本部員

会場: Indoor Multi Stadium Indonesia Arena



参加国:

選手:エントリー 61カ国

アイスランド, アゼルバイジャン, アメリカ, アルジェリア, イギリス, イタリア, インド, インドネシア, ウクライナ, ウズベキスタン, エジプト, オーストラリア, オーストリア, オランダ, カザフスタン, カタール, カナダ, カメルーン, 韓国, クロアチア, コスタリカ, シリア, シンガポール, ジャマイカ, スイス, スウェーデン, スペイン, スリランカ, スロベニア, タイ, 台湾, チェコ, 中国, チリ, トルコ, ドイツ, ナミビア, 日本, ニュージーランド, ノルウェー, ハンガリー, パナマ, フィリピン, フィンランド, フランス, ブラジル, ブルガリア, ベトナム, ベネズエラ, ベルギー, ペルー, 香港, ポーランド, ポルトガル, マレーシア, 南アフリカ, メキシコ, モンゴル, ラトビア, ルーマニア, 個人中立選手(ペラルーシ, ロシア)

審判:54 カ国 74 名(D 審判8名・E 審判66名)

審判抽選:

D 審判団は事前に FIG 技術委員より指名され決定されており、全競技を通して同じ種目を担当した。E 審判、アシスタント、補審の抽選は、予選では競技前日に、個人総合決勝および種目別決勝では競技当日に行われた。各国必ず 1 回は E 審判に入れるように配慮されていたため、個人総合決勝の抽選は、まず予選で E 審判に入らなかった国(予選でアシスタントと補審だった国も含む)の中から行われた。種目別決勝の抽選については、カテゴリー1 とカテゴリー2 の審判のみを対象とし、出場する国(リザーブ 1 を含む)の審判を除いて行われた。

抽選結果: 日本(高橋)の担当種目 予選 ゆか 線審1
個人総合決勝 跳馬 E1

審判会議:

全体の会議では E スコアに関する説明のみが行われた。採点規則2025年版が適用される初めての世界選手権であったが、国際審判講習会で示された内容からの変更はなく、各種目における減点の再確認と採点研修が実施された。採点研修については、事前にオンライン上にアップロードされた各種目3演技ずつの映像を各自が採点をし、当日の審判会議にて参考スコアや減点の詳細について確認が行われた。

さらに会議当日には事前研修とは異なる映像を使用し、各種目3~4演技ずつ採点研修が実施された。

成績概況：

【予選】

種目ごとの出場人数

跳馬：117名 段違い平行棒：119名 平均台：129名 ゆか：115名

1)全体の傾向について

今大会は主力選手を派遣していない国が多く、また種目を絞って出場する選手も多かった。これまでオリンピック翌年の世界選手権では、主力選手が欠場し、若手や経験の少ない選手を派遣する国が多い傾向であったが、今大会も同様の状況であった。演技については全体的に完成度が低く、段違い平行棒や平均台では大過失が目立ち、ゆかでは着地の乱れやラインオーバーが非常に多かった。

他国様子としては、アメリカ、ブラジルはいずれも主力選手を派遣していなかったため、今大会では圧倒的な強さは感じられなかった。イタリアは主力選手が不在ながらも次世代強化が進んでいる様子がうかがえたが、若手選手にミスが多く、経験豊富な選手との差を感じた。ドイツも新しいメンバーで臨んでおり、これまで課題とされてきた跳馬やゆかで高いDスコアの演技構成に挑戦するなど強化の進展を感じられた。

2)日本選手について

予選では、杉原選手と岸選手が4種目に出場し、岡村選手は平均台とゆか、中村選手は段違い平行棒のみに出場した。杉原選手は個人総合2位で通過、種目別では平均台で5位、ゆかで4位となり、2種目で決勝進出を果たした。岸選手は個人総合8位で通過し、種目別ではゆかで2位となり、決勝進出を果たした。岡村選手と中村選手は惜しくも決勝進出はならなかった。

【個人総合決勝】

個人総合決勝における結果は表のとおり。

表1 個人総合決勝 上位8名の得点

順位	選手	国	得点				
			VT	UB	BB	FX	合計
1	MELNIKOVA	AIN	14.100	14.700	12.800	13.466	55.066
2	WONG	USA	14.466	13.800	13.500	13.200	54.966
3	ZHANG	CHN	13.000	13.900	14.833	12.900	54.633
4	NEMOUR	ALG	13.466	15.166	13.066	12.866	54.564
5	D'AMATO	ITA	13.966	13.866	12.900	12.800	53.532
6	岸 里奈	日本	13.966	13.033	13.433	12.800	53.232
7	杉原 愛子	日本	13.900	12.200	13.366	13.666	53.132
8	MARTIN	GBR	13.866	13.466	12.400	13.266	52.998

順位	選手	国	Dスコア合計						Eスコア合計						ペナルティー
			VT	UB	BB	FX	合計	順位	VT	UB	BB	FX	合計	順位	
1	MELNIKOVA	AIN	5.0	6.3	5.6	5.6	22.5	2	9.100	8.400	7.200	7.966	32.666	2	ペナルティー 0.10
2	WONG	USA	5.6	5.7	5.5	5.3	22.1	3	8.866	8.100	8.000	7.900	32.866	1	
3	ZHANG	CHN	4.4	5.7	6.7	5.2	22.0	4	8.600	8.200	8.133	7.700	32.633	3	
4	NEMOUR	ALG	5.0	6.9	5.8	5.3	23.0	1	8.766	8.266	7.266	7.566	31.864	5	ペナルティー 0.30
5	D'AMATO	ITA	5.0	6.0	5.4	5.2	21.6	7	8.966	7.866	7.500	7.600	31.932	4	
6	岸 里奈	日本	5.0	5.7	5.9	5.4	22.0	4	8.966	7.333	7.533	7.500	31.332	7	ペナルティー 0.10
7	杉原 愛子	日本	4.6	5.2	5.9	5.8	21.5	8	9.300	7.000	7.466	7.866	31.632	6	
8	MARTIN	GBR	5.0	5.6	5.4	5.8	21.8	6	8.866	7.866	7.000	7.566	31.298	8	ペナルティー 0.10

優勝は55.066を獲得した MELNIKOVA 選手(AIN)であった。平均台では落下があったものの、他の3種目ではダイナミックかつ美しい演技を実施し、高い E スコアを獲得した。2位は54.966を獲得した WONG 選手(USA)で、4種目とも大過失なく安定した演技であった。3位は54.633を獲得した ZHANG 選手(CHN)であり、特に平均台で14.833という高得点を獲得したことが銅メダルにつながったと考えられる。

日本は、岸選手が53.232で6位入賞を果たした。4種目とも大過失なく演技をしたものの、跳馬以外の3種目で E スコアが7.500前後にとどまり、得点を伸ばしきれず、残念ながらメダル獲得とはならなかった。杉原選手は、予選ではミスなく演技をして全体の2位で通過したが、決勝では段違い平行棒で落下があり、惜しくも53.132で7位となった。

今大会の結果からも明らかのように、個人総合でのメダル獲得を目指すためには55.000以上の得点を獲得することが不可欠である。そのためには跳馬で E スコア9.000以上、他の3種目では8.000以上を獲得することが必須であり、さらに演技の美しさと安定性を保ちながら D スコアを上げていくことが今後の日本選手の課題であると考えられる。

【種目別決勝】

1)跳馬

決勝における結果は表のとおり。

表2 種目別決勝 跳馬の得点

順位	選手	国	Dスコア	Eスコア	ペナルティー	合計	ボーナス	最終スコア
1	MELNIKOVA	AIN	5.0	9.100		14.100	0.2	14.466
			5.6	8.833		14.433		
2	FONTAINE	CAN	5.0	8.933		13.933	0.2	14.033
			4.8	8.933		13.733		
3	ROBERSON	USA	5.2	8.766		13.966	0.2	13.983
			5.0	8.600		13.600		
4	VAELEN	BEL	5.4	8.700		14.100	0.2	13.866
			4.4	8.833		13.233		
5	SCHOENMAIER	GER	5.6	8.933	2.0	12.533	0.2	13.483
			5.0	9.033		14.033		
6	KALMYKOVA	AIN	5.4	7.566	0.1	12.866		13.199
			4.6	8.933		13.533		
7	MOERZ	AUT	3.8	8.900		12.700	0.2	13.133
			4.4	8.766		13.166		
	DENG	CHN				DNS		DNS
						DNS		

今大会では、決勝であるにも関わらず稀に見るアクシデントが相次いだ。

演技順1番目のDENG選手(CHN)は、1回目の跳躍を試みたものの技を実施できずに跳躍台をジャンプで飛び越してしまい、DNS(跳躍技を実施しない)となった。1回目がDNSの場合は2回目の跳躍は認められないため、得点なし・順位なしという結果となった。また、SCHOENMAIER選手(GER)は、1回目の跳躍で「ロンダート後ろとび½ひねり～前方伸身宙返り1½ひねり」を実施したが、跳躍台に片手しか触れず、「片手のみの支持 -2.00」の減点が適用された。さらにMOERZ選手(AUT)は1回目で「前転とび～前方伸身宙返り½ひねり」を予定していたが、かかえ込みでの実施となり、Dスコアを下げてしまった。これらの事例により、最終的には予定通りの技を大過失なく実施した選手が上位に入る結果となった。

日本は今大会で種目別決勝進出を狙った選手はいなかったが、今後メダル獲得を目指すためには、2本ともDスコア5.0以上の跳躍技で、さらに9.000以上のEスコアを獲得することが必須となる。特に着地はEスコアに大きく影響するため、着地の先取りができた高い体勢での安定した着地を目指すことが必要である。

2)段違い平行棒

決勝における結果は表のとおり。

表3 種目別決勝 段違い平行棒の得点

順位	選手	国	Dスコア	Eスコア	ペナルティー	最終スコア
1	NEMOUR	ALG	7.1	8.466		15.566
2	MELNIKOVA	AIN	6.3	8.200		14.500
3	YANG	CHN	6.7	7.800		14.500
4	BLAKELY	USA	6.2	8.133		14.333
5	McDONALD	AUS	6.0	8.166		14.166
6	VASILEVA	AIN	6.2	7.866		14.066
7	VISSEER	NED	6.2	7.866		14.066
8	SZEKELY	HUN	5.8	6.633		12.433

表4 種目別決勝 段違い平行棒のDスコアの内訳

順位	選手	国	DV	CR	CV	DMT
1	NEMOUR	ALG	3.8	2.0	1.1	0.2
2	MELNIKOVA	AIN	3.5	2.0	0.6	0.2
3	YANG	CHN	3.9	2.0	0.6	0.2
4	BLAKELY	USA	3.6	2.0	0.4	0.2
5	McDONALD	AUS	3.3	2.0	0.5	0.2
6	VASILEVA	AIN	3.5	2.0	0.5	0.2
7	VISSEER	NED	3.5	2.0	0.5	0.2
8	SZEKELY	HUN	3.4	2.0	0.4	

表5 日本選手の予選における段違い平行棒の得点およびDスコアの内訳

	Dスコア	Eスコア	ペナルティー	最終スコア
杉原	5.4	8.000		13.400
岸	5.5	6.300		11.800
中村	6.1	7.400		13.500

	DV	CR	CV	DMT
杉原	2.9	2.0	0.3	0.2
岸	3.2	2.0	0.1	0.2
中村	3.6	2.0	0.3	0.2

優勝した NEMOUR 選手(ALG)は Dスコア Eスコアともに8名中最も高いスコアを獲得し、2位以下の選手に1.000以上の差をつける圧倒的な強さであった。特に組み合わせ点(CV)については2位以下の選手は0.40~0.60であったのに対し、NEMOUR 選手は8つの技を連続させ1.10を獲得している。8位の SZEKELY 選手は終末技で転倒し、終末技ボーナス(DMT)を獲得できなかったが、決勝に進出したすべての選手が6.00以上のDスコアを有していた。

一方、日本選手の予選のスコアを見ると、杉原選手と岸選手は難度点(DV)、組み合わせ点(CV)ともに上位選手との差が大きく、中村選手はDスコア6.10を獲得したものの、組み合わせ点については0.30にとどまっている。

段違い平行棒でメダル獲得を目指すためには、14.500以上が必要となる。世界と比較すると、日本選手はDスコアが低いことが明らかであり、さらにEスコアにおいても得点を伸ばしきれていないのが現状である。振幅の大きさや空中局面を伴う技での高さ、ダイナミックさの差は明らかで、スイングなどの運動も含めた1つ1つの技の実施そのものが世界との差につながっていると考えられる。したがって、今後はDスコアの向上と同時に、Eスコアで確実に8.000以上を獲得できるよう、日本全体での取り組みが不可欠である。

3)平均台

決勝における結果は表のとおり。

表6 種目別決勝 平均台の得点

順位	選手	国	Dスコア	Eスコア	ペナルティー	最終スコア
1	ZHANG	CHN	6.9	8.266		15.166
2	NEMOUR	ALG	6.2	8.100		14.300
3	杉原 愛子	日本	6.0	8.166		14.166
4	SARAIWA	BRA	5.7	8.200		13.900
5	BLACK	CAN	5.8	7.800		13.600
6	YAP	SGP	5.4	7.933		13.333
7	MANECA-VOINEA	ROU	5.8	6.733		12.533
8	CAYLOR	USA	5.0	6.900	0.1	11.800

表7 種目別決勝 平均台のDスコアの内訳

順位	選手	国	DV	CR	CV	DMT
1	ZHANG	CHN	3.3	2.0	1.4	0.2
2	NEMOUR	ALG	3.2	2.0	0.8	0.2
3	杉原 愛子	日本	3.2	2.0	0.6	0.2
4	SARAIWA	BRA	3.1	2.0	0.4	0.2
5	BLACK	CAN	3.1	2.0	0.5	0.2
6	YAP	SGP	2.9	2.0	0.5	
7	MANECA-VOINEA	ROU	3.3	2.0	0.3	0.2
8	CAYLOR	USA	2.8	2.0	0.2	

表8 日本選手の予選における平均台の得点およびDスコアの内訳

	Dスコア	Eスコア	ペナルティー	最終スコア		DV	CR	CV	DMT
杉原	5.8	7.633		13.433	杉原	3.2	2.0	0.4	0.2
岸	5.7	6.966		12.666	岸	3.3	2.0	0.2	0.2
岡村	5.8	6.566		12.366	岡村	3.4	2.0	0.2	0.2

今大会の決勝では、2名の選手に落下があったものの、その他の選手は非常に安定した演技を見せ、4名がEスコア8.000以上を獲得し、結果的にDスコアの差が順位を左右することになった。杉原選手も予選よりもDスコアを伸ばし、安定した演技で銅メダルを獲得した。

決勝8名のDスコアの内訳に注目すると、難度点(DV)には大きな差は見られない一方で、組み合わせ点(CV)については0.20~1.40と非常に大きな差が見られる。優勝したZHANG選手(CHN)は1.40の組み合わせ点を獲得しており、単発で実施された技は「片足立ち1回ターン」のみでそれ以外はすべて2つ以上の技を組み合わせた構成であった。また、ZHANG選手はDスコア、Eスコアともに最も高いスコアを獲得しており、1つ1つの技を正確に欠点なく実施できることが技の連続を可能にし、多くの組み合わせ点の獲得につながっていると考えられる。

日本選手は、難度点に関しては上位選手との差は見られないものの、単発で実施される技が多く、組み合わせ点が少ない点が課題であるといえる。今後は1つ1つの技の正確さを高めて複数の技を組み合わせること、また確実に組み合わせ点を獲得できる構成を目指すことが課題である。

4) ゆか

決勝における結果は表のとおり。

表9 種目別決勝 ゆかの得点

順位	選手	国	Dスコア	Eスコア	ペナルティー	最終スコア
1	杉原 愛子	日本	5.8	8.033		13.833
2	EVANS	GBR	5.9	7.766		13.666
3	MARTIN	GBR	5.8	7.666		13.466
4	MANECA-VOINEA	ROU	5.9	7.566		13.466
5	岸 里奈	日本	5.8	7.233		13.033
6	CAYLOR	USA	5.6	7.366		12.966
7	GOLGOTA	ROU	4.9	7.333		12.233
8	PEROTTI	ITA	4.9	6.733		11.633

表10 種目別決勝 ゆかのDスコアの内訳

順位	選手	国	DV	CR	CV	DMT
1	杉原 愛子	日本	3.2	2.0	0.4	0.2
2	EVANS	GBR	3.3	2.0	0.4	0.2
3	MARTIN	GBR	3.4	2.0	0.2	0.2
4	MANECA-VOINEA	ROU	3.3	2.0	0.4	0.2
5	岸 里奈	日本	3.4	2.0	0.2	0.2
6	CAYLOR	USA	3.1	2.0	0.3	0.2
7	GOLGOTA	ROU	3.0	1.5	0.2	0.2
8	PEROTTI	ITA	2.8	2.0	0.1	

表11 日本選手の予選におけるゆかの得点およびDスコアの内訳

	Dスコア	Eスコア	ペナルティー	最終スコア
杉原	5.7	7.666		13.366
岸	5.7	7.866		13.566
岡村	5.4	7.500	0.1	12.800

	DV	CR	CV	DMT
杉原	3.1	2.0	0.4	0.2
岸	3.3	2.0	0.2	0.2
岡村	3.0	2.0	0.2	0.2

ゆかの決勝では、杉原選手がすべての技で着地をしっかりとまとめ、Eスコア8.033を獲得して優勝した。岸選手は予選を2位で通過しメダル獲得の期待がかかったが、複数箇所で着地が乱れてしまい、残念ながらメダル獲得はならなかった。上位選手のDスコアには大きな差がなく、最終的にはEスコアの差が順位を左右する結果となった。ゆかではいかに着地を欠点なくまとめられるかが重要であるが、日本選手の演技を振り返ると、着地の際に頭の位置が低くなる傾向が多く見られる。今後は高い体勢での着地を目指し、減点を最小限に抑えることが課題となる。

また、芸術性に関しては表情や振り付けに工夫が見られる選手も見受けられたが、全体としては「芸術的な演技」として印象に残るものは少なかった。ゆかの芸術性の減点項目は構成の減点と合わせて11項目あるが、その一部を満たすだけでは芸術的な演技にはならない。身体の姿勢、動きの大きさ、表現力、音楽との関連性などすべてを十分に満たすことで審判員や観客の心を動かす演技につながるのではないかと感じた。

全体所感：

今大会、日本選手は杉原選手が種目別ゆかで金メダル、平均台で銅メダルを獲得し、岸選手も種目別ゆかで決勝に進出し5位という成績を残した。また個人総合では岸選手が6位、杉原選手が7位入賞を果たし、各国の主力選手が欠場する状況下ではあったものの、次のオリンピックへ向けたスタートとなる大会で素晴らしい成績を収めることができた。一方で、今大会はメダル獲得が視野に入る状況で実力を出し切ることの難しさを改めて痛感させられる大会でもあった。今後はオリンピック出場権がかかる大会や、メダル獲得の可能性がある場面も想定されるため、そうした緊張感の中でも正確で安定した演技を実施できる力が求められる。

また、今大会は日本の課題が明確に示された大会でもあった。特に段違い平行棒では他国との差が顕著であり、振幅の大きさや空中局面を伴う技の高さなど、各技の質を高めなければ上位国との差を縮めることは難しいだろう。来年の世界選手権、さらにはロサンゼルスオリンピックでのメダル獲得を見据え、Eスコア8.000以上を安定して獲得できる演技を目指すとともに、Dスコアの向上にも継続的に取り組む必要がある。

以上